

書評

稀代の財政家であり国際人 高橋是清の生涯

『高橋是清－日本のケインズ その生涯と思想』
リチャード・J・スメサート(著)、
鎮目雅人、早川大介、大貫摩里(訳)、
東洋経済新報社、2010 年 10 月 12 日刊

北村行伸

Kitamura Yukinobu

一橋大学経済研究所教授

本書は、非嫡出子で足輕の養子という自出から、13 歳でアメリカに渡り、英語を身につけ、帰国後、わずか 14 歳で大学南校の英語講師になり、それを皮切りに数々の官職を経て日銀総裁、大蔵大臣、総理大臣にまでなり、最後は二・二六事件で兇弾に倒れるまで、日本の中心で国のためにひたすら働き続けた戦前の傑出した人物、高橋是清の生涯を描いたものである。

数多くある高橋是清に関する著作の中で、本書の特色と言えるのは次の点である。

第一に、著者は高橋に対して極めて好意的な評価を与えているが、特定のイデオロギーや経済思想から高橋を解釈するのではなく、客観的に高橋の生涯を追っている。いくつかの高橋の政策や判断に関しては、議論の余地はあると思うが、全体を通して見ればバランスのとれた伝記となっている。

第二に、著者は英語資料に丁寧に目を通し、高橋の英米での活躍について初めて詳細を明らかにしている。とりわけ日露戦争の戦費調達をロンドン外債市場で行ったいきさつや、それを支えた、ユダヤ系アメリカ人資本家シフをはじめパース銀行のシャンドやロスチャイルド家との親交が詳細に描かれている。高橋が当時の国際金融界の中核とどのような接点があったのか、金融界に関心のある人であれば、興味を引かれる多くの事実が明らかにされている。

第三に、著者は高橋の英米での活躍を世界史的な視野の中で捉えることによって、

日本人の手による高橋研究ではほとんど触れられることのない側面が描かれている。例えば、アメリカ人資本家シフはユダヤ人として、ロシア帝政のユダヤ人に対する仕打ちに反発しており、そのロシア帝政を打倒するためであれば、日露戦争の日本側の戦費のかなりの額を調達することをいとわなかったという点、同時にフランスやドイツにはロシアを支援してロシア国債を大量に買い込んだ資本家もいたという事実などは、これまでほとんど意識されてこなかったのではないだろうか。ロンドンやパリの国債市場での資金調達は決して国債の利回りや償還条件、割引率などの損得勘定だけではなく、資本家の世界観や偏見によっても決められていたという事実は特筆しておくべき点であり、そこに高橋が如何に食い込んで行ったかが良く描かれている。

また、実際に、日本海軍が使った軍艦の 17 隻中 14 隻はイギリス製のものであり、また、軍艦の大砲が用いていた距離計もイギリス人の発明によるものであった。さらに、軍艦を動かす石油はシェル石油から購入したものであったことなども通常は意識されて来なかったが重要な論点である。すなわち、事実として、資金的にも技術的にも英米の協力なくしては、日本が日露戦争で華々しい戦果を挙げることは不可能であったということである。残念ながら、この事実を身にしみて感じていたのは高橋らごく少数であり、大多数の国民は自らの力を過信するに至り、その後、軍事的拡張主義に流されていくことになった。

高橋是清と言えば、昭和恐慌期の高橋財政として知られる拡張的財政政策および通貨切り下げによる景気回復策が取り上げられることが多いが、本書では国際人としての高橋の側面に新たな光が当てられたと言える。また、このような国際人を育てた明治という時代背景や高橋に代わる人材を育てられなかった限界についても考えさせられる。

最後に、訳が極めて読みやすく、原資料との照合も丁寧に行われており、訳注も適切で貴重な情報を与えてくれていることも特記しておきたい。